

総説

中世日本の西の境界領域と黒潮トライアングル研究 －鹿児島県三島村硫黄島の調査を踏まえて－

市村高男

要 旨

鹿児島県三島村は、薩摩半島の南西海上に浮かぶ離島であり、竹島・硫黄島・黒島の三つの島からなる。これらの三つの島はトカラ列島とともに、中世日本の西の境界領域であった。この点に着目し、私は三つの島の文書・遺物の調査と遺跡の調査を実施した。本稿は、それらの成果を報告し、西の境界領域研究の新たな発展の基礎を固めた。また、本研究と黒潮トライアングルとの関係についても言及した。この研究によって、私は下記の点を明らかにした。

まず第1に、三つの島の歴史的変遷を明らかにした。三つの島は、12世紀後半、13世紀末～14世紀前半、15世紀後半～16世紀後半に大きな画期があり、第3の画期が近世の島社会の出発点となった。

第2に、硫黄島の三回目の変化は、島外からの新たな移住者である長浜家や岩切家らの活動によってもたらされた。長浜家は海の有力な商人であり、岩切家は硫黄採掘に関わる技術者であった。やがて長浜家は硫黄島の支配権を掌握し、君臨した。

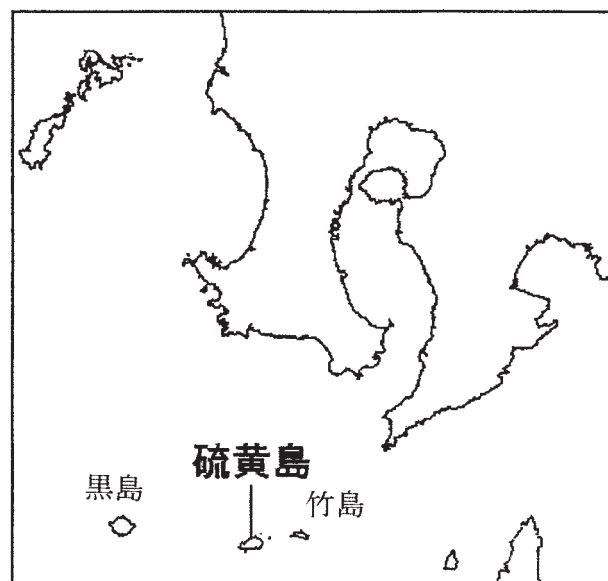
第3に、竹島・硫黄島・黒島やトカラ列島がある海域は、多くの部分が黒潮の流れに洗われており、そこに点在する島は、航海する船の寄港地として重要な役割を果たしていた。島津氏や種子島氏は、島の支配と商船の支配を一体的に考えていた。この海域の島々は、九州と沖縄との間の航海において、不可欠の存在であった。

第4に、この研究がフィールドとした島々や海域は、大半が黒潮トライアングルと重なっている。そこは人やモノの行き交う場であり、日本と琉球のせめぎ合いの場でもあった。それゆえ、この海域や島々の研究は、人文科学から黒潮トライアングルを考えることと深く関連する。自然科学と人文科学・社会科学との協働による研究の進展が望まれる。

キーワード：境界領域、硫黄島・竹島・黒島、島内史料、黒潮

はじめに

鹿児島県三島村は、薩摩半島の南西海上に浮かぶ離島であり、竹島・硫黄島・黒島の三島から構成されている（第1図参照）。古代・中世においては、トカラ列島の島々（現鹿児島県十島村にほぼ相当）と合わせて、「日本国」の西の境界領域（当時は日本列島が東西に細長く延びていると考えられていたため、方位観も現在と違って南が西と認識されていた）であった「きかいがしま」（貴賀島、貴海島、鬼界島）として知られる。その中でも中心的な位置を占めるのが硫黄島であり、すでに11世紀後半から東アジアを代表する良質な硫黄産出地として広く注目されるところであっ



第1図 硫黄島の位置

2013年3月4日受理；2013年3月11日受理
高知大学総合科学系黒潮圏科学部門（教育学部）
〒780-8520 高知市曙町2-5-1
＊連絡責任者 e-mail address: ichimura@kochi-u.ac.jp

た。

私は、これまで硫黄島の島外史料によって語られていた「鬼界島」の実像を島内の史料によって解明すべく、南さつま市坊津輝津館学芸員の橋口 亘氏とともに、「中世鬼界島の史料・遺物・遺跡調査とその学際的研究－硫黄島・黒島・竹島（鹿児島県三島村）を中心とした日本と琉球・東アジアとの交流の視点から－」というプロジェクトを立ち上げ、三菱財団の助成金を得て、古文書・記録や石造物の調査、踏査による村落景観の復元、陶磁器類の地表面採取などを進めてきたが、その過程で地表面観察による調査の限界を感じ、島内の一角で発掘調査を実施することによって、三菱財団の助成金による調査・研究との相乗効果を上げようとするに至った。

この趣旨で黒潮圏科学部門の黒潮講に申請書を提出し、予算の配分を得て実施したプロジェクトが、「硫黄産出地としての硫黄島の発掘調査－黒潮トライアングル研究の発展を目指して－」であった。鹿児島県では、原則として行政以外の発掘を認めないことになっていったが、三島村教育委員会（当時）の岩切 東氏

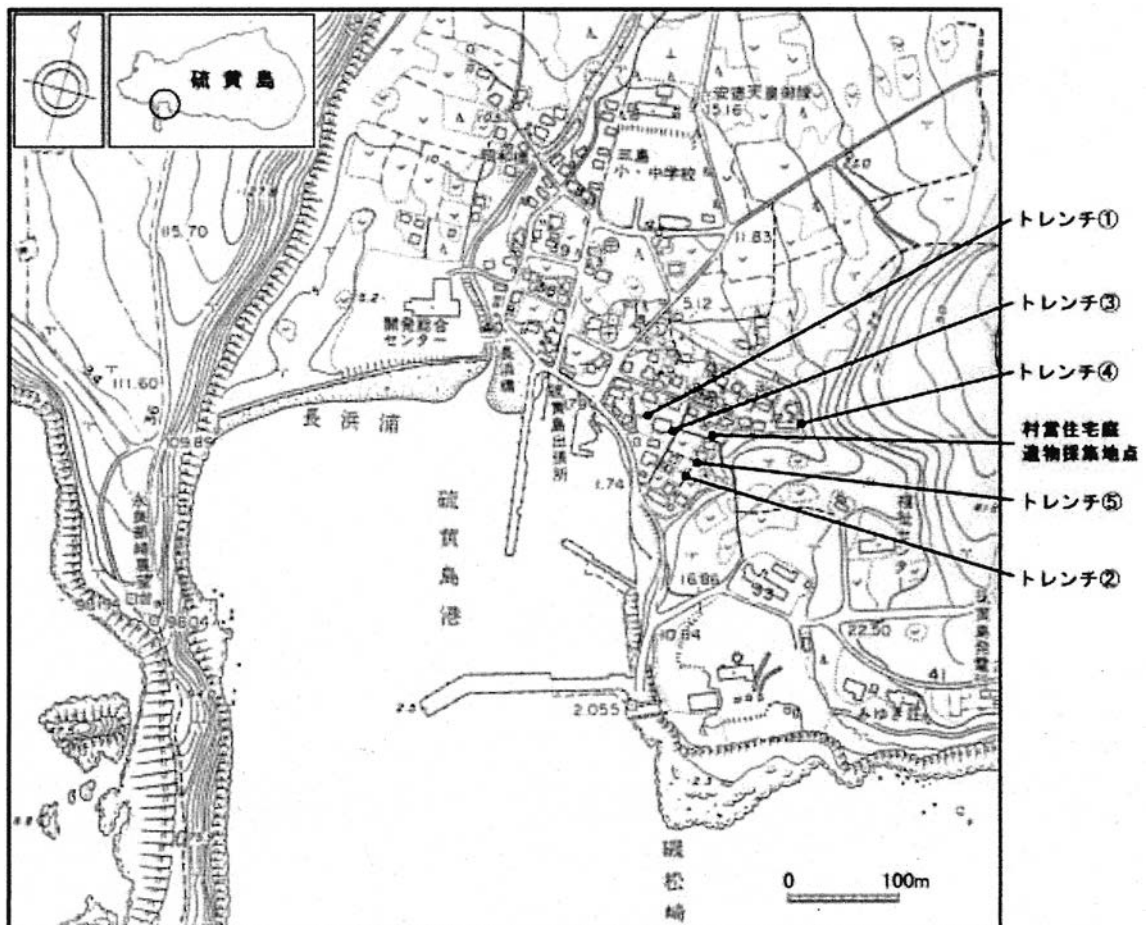
らと連携して「三島村硫黄島遺跡調査会」（代表・市村高男）を結成し、県文化財課の信任の篤い雨宮瑞生氏を発掘主担当者として迎えたほか、さまざまな手続きを経て幸いにも許可を得ることができた。そして、県教育庁文化財課（担当・前迫亮一氏）の指導のもと、2012年正月5日に調査を開始し、雨天で中断した2、3日を挟んで同月18日に終了した。

本稿は、この発掘調査によって得られた成果を紹介するとともに、三菱助成金との相乗効果によって見えてきた新たな事実や論点を提示しようとするものである。

I. 硫黄島の発掘調査の成果

1. 発掘調査の概容

今回の調査では、安徳天皇の末裔と伝える長浜氏屋敷（長浜氏の子孫は離島し、屋敷地は村の管理下にある）であった「黒木御所跡」をはじめ、硫黄島集落内の5か所にトレンチ（試掘溝）を設定し（第2図参照）、発掘調査を行った。当初はトレンチ①・②の



第2図 硫黄島集落と調査地点の位置

2か所を調査する予定であった（ともに2m×4m）が、「黒木御所跡」敷地内の①は、昭和期頃の攪乱が大きく、土層堆積がほとんど確認できず、また、集落内の道路の一角である②は、埋設してあった水道管にぶつかり、途中で調査を断念せざるを得ない状態となった。①は攪乱がひどく地山を確認することができなかったものの、60cm余まで掘り下げても砂層がつづいていることから、かつては硫黄島港のある湾に面した砂浜（長浜と呼ばれる）が、この周辺にまで広がっていたことを推測させる。また、①よりも東南に位置し、そのすぐ東側に丘陵がある②では、表土や覆土から宋代の陶磁器が確認されており、この周辺に中世の遺構が埋もれていることを示していた。

しかし、これでは当初予定した調査目的を、ほとんど達成できなかったことになるので、緊急に県文化財課や村教育委員会と協議し、新たにトレンチ③～⑤の設定の許可を得て、引き続き発掘調査を実施することになった。

③は「黒木御所跡」敷地内東奥の庭（屋敷内の神社の前）に2m×4mの規模で設定した。敷地中央に建つ復元建物を挟んで、先述の①と反対側の西奥に当たる。このトレンチでは、現在の表土の下から5cmほどの造成土層とそれを彫り込んだピット（柱穴）を確認したが、造成土層の下から幕末～明治期頃のものと思われる瓦が検出され、中世に遡る遺構の可能性はほとんどないことが分かった。

これに対して、④と⑤からは中世の遺物が多く検出された。④は集落中心部の最も東にある民家の敷地（岩切東氏宅）に2m×4mの規模で設定、また、⑤は②に近い集落内の道路の一角に0.75×2mの規模で設定した。④⑤の東側には丘陵が立ち上がっており、ともに海風の直撃を受けないところに立地する。このうち④では、複数のピットのほか、明代の中国産陶磁器や備前播鉢・肥前系染め付けなど中近世の陶磁器や滑石製品などが出土し、⑤では宋代の中国産陶磁器や中世の日本産陶器などが出土しており、東側の丘陵に沿った地域ほど、中世の遺構が濃密に分布している可能性が高まった（三島村硫黄島遺跡調査会2012）。

その他、村営住宅の庭でも中国産陶磁器、日本産陶磁器や滑石製品が採取されたが、ここは住宅造成に際し、東側から延びる丘陵の尾根を削平したとのことであり、遺物の元の所在地を確認することは難しい。

2. 発掘調査によって見えてきたこと

今回の発掘調査によって、硫黄島の集落内から中世の遺物が出土し、中世から人々の生活と生産が開始されていたことが確認された。すでに私たちは、三菱財団の助成金による調査によって、硫黄島に中世の貿易陶磁器が散布することを確認していたが、それはあくまでも表面採取によるものであり、実際に発掘調査を実施し、土中に埋没していた中世の遺物を確認した意義は大きい。鹿児島県文化財課の文化財保護の方針により、出土したピットを完掘し、その年代を確認することはできなかったが、屋敷内や現在の道路の下からも複数のピットが出土したことによって、この集落内には確実に中世遺構が存在すること、しかもその配置は現在の集落の道路割りや屋敷割りとかなり異なることを明らかにすることができた。

また、出土した中国産の陶磁器が、11世紀半ば～12世紀を中心とする宋代ものと15～16世紀の明代のものを中心としていることから、硫黄島の集落が11世紀半ばから稼働し、発展していくこと、14世紀の遺物が検出されなかったが、15～16世紀になってふたたび多くの貿易陶磁器を受容し得る状況が確認されること、などが明らかになった。これまで硫黄島を含めた「きかいがしま」（貴賀島、貴海島、鬼界島）に関する諸研究が、12～14世紀を中心に論じられることが多かったことを想起するならば、それ以降の硫黄島などを考える上で重要な事実を提示することができたといえるであろう。さらに陶磁器類の年代観に二つのピークがあり、13世紀後半～15世紀前半がその端境期であることは、この時期が硫黄島の転換期に当たっていることを暗示していよう。14～15世紀、とりわけ15世紀は日本社会のみならず、世界史上でも大きな転換期に当たっており、「きかいがしま」をめぐる諸研究においても、必ず念頭に置かなくてはならない問題である。

つぎに注目される点は、硫黄島の遺物出土・散布地点が、丘陵沿いの集落の東側に偏在する傾向がある事実である。もちろん、硫黄島の中心である熊野神社の東側では、地表面採取によって多くの貿易陶磁器が検出されているが、それと並ぶ密度の濃い散布地は、いずれも集落の東にある丘陵に沿った地域であり、今回の発掘調査でも同様の傾向を確認している。この事実は、硫黄島の集落が、一方では熊野神社を核とする宗教施設を中心としつつも、海風の直撃を受けない東側の丘陵沿いのほうから屋敷地が成立し、拡大していったことを予想させる。

一方、熊野神社とともに集落の中心をなす「黒木御

所跡」では、現在の表土層（これは客土である）から若干の中近世の遺物が検出されるとはいえ、当初の予想に反して明確に遺構や遺物を確認できなかった。もとより本格的な調査を待たずに結論を急ぐべきではないが、現在の表土層の下に予想以上に厚い砂層があることから見て、この「黒木御所跡」一帯（とりわけその西側）は、かつて長浜の一部をなす砂浜が広がっていたと考えて間違いなさそうである。

それでは、集落の中心に屋敷を構える長浜氏の存在は、どう考えればよいのであろうか。

長浜氏は安徳天皇落胤の子孫との家伝を有し、近世・近代においては事実上の島主であった。「長浜氏嫡流系譜」（三島村保管史料）によれば、平重盛の子資盛が安徳天皇に供奉して硫黄島へ住み着いたあと、やがて資盛の娘（櫛匣局）が天皇に仕え男子を産み、その子が資盛嫡子吉盛の跡を嗣いで隆盛親王と名乗った（はじめは吉英）が、その子孫が長浜氏であるという。このうち資盛は実在の人物であるが、その事蹟の内容は事実とほど遠いものであり、長門壇ノ浦で死んだはずの安徳天皇が硫黄島に來たという話や、吉盛・櫛匣局・隆盛親王らの事蹟に関しても、常識的には到底受け入れられるものではない。

「長浜氏嫡流系譜」の記載が、荒唐無稽な世界から脱却し、多少なりとも現実の世界に近づいてくるのは、14世紀後半－15世紀以降のことであり、この頃になると硫黄島内の有力者や竹島・黒島の有力者との婚姻関係についての記載が散見し、また、長浜氏一族の海商としての活動の一端も記載されるようになってくる。その点で注目されるのは、今回の発掘調査で15－16世紀代の陶磁器の出土が目立った岩切氏宅であり、出土遺物からうかがえるこの屋敷の本格的な稼働時期が15世紀以降であったことである。岩切氏の先祖は、長浜氏の先祖と一緒に硫黄島へ來島したとされているが、長浜氏屋敷跡である「黒木御所跡」の発掘でも、長浜氏の硫黄島來島を12世紀末とする物証はまったく得られず、系図の記載や岩切氏宅の遺物出土状況から判断するならば、同氏の來島時期が15世紀以降に下る可能性が高まったといつてよからう。

以上のように、硫黄島では11世紀半ば頃から貿易陶磁器が使用され、本格的な稼働期を迎えることになるが、その頃の集落は、港湾の正面にある熊野神社などの宗教施設を核としつつも、それよりも東側の丘陵沿いに形成され、しだいに海に向かって拡大していったと考えられる。近世・近代の硫黄島で大きな勢力を振

るった長浜氏は、それよりもかなり遅れた15世紀以降に岩切氏らと來島し、港を臨む砂層の上に新たに屋敷を構え、やがて安徳天皇落胤の末裔とする家伝をつくり出し、硫黄島の事実上の支配者として君臨するようになったと見なすことができよう。

II. 中世の硫黄島・竹島・黒島の実像

1. 島外史料による中世三島の概観

硫黄島は、1177年（安元3）の鹿ヶ谷事件で藤原成経・平康頼・俊寛が配流に処せられた島として有名である。『平家物語』では、彼らが流されたのは「薩摩方鬼界が島」であり、この島は京都から「遙々と多くの波路を凌いで行く処なり。おぼろげにて船も通はず、島には人希なりけり。おのずから人はあれども、衣装なければ、この土の人にも似ず、云ふ言葉をも聞き知らず。身には頻りに毛生ひつつ、色黒うして牛のごとし。」「島の中には高き山あり。鎮に火燃ゆ。硫黄と云ふ物充ち満てり。かるが故にこそ硫黄が島とは名づけたれ。」（『平家物語』巻第二）などと記している。これによれば、「薩摩方鬼界が島」は島の中に高い火山があり、硫黄に満ちあふれているところから「硫黄が島」と名付けられたとする。この点の描写は、現在の硫黄島を彷彿とさせるものがある。

その一方で、硫黄島は京都の遙か彼方に存在し、多くの荒波を越えて行く僻遠の地であり、ほとんど船も通わず住む人も僅かしかない、しかも彼らは衣装も付けずに本土の人とまったく異なっており、話す言葉は聞いたこともなく、身体は毛深く色黒でまるで牛のようである、と記している。現在の認識からすれば、これは実態を知らない者の偏見による見方といわざるを得ないが、『平家物語』の成立に関わった人々は、いずれも京都かその周辺の住人であり、彼らにとって硫黄島は、まさしく「日本国」と「外国」との境界領域にある得体の知れない島であった。もとより伝聞による僅かな知識があったとしても、薩摩の南方海上に浮かぶ島を茫漠とイメージしていたのが実情であり、それが「身には頻りに毛生ひつつ、色黒うして牛のごとし。」という認識を生みだし、人ならぬ鬼が住む鬼ヶ島にも通じる「鬼界が島」の表記を採るようになったのである。

『平家物語』は源平合戦を中心に叙述されているが、その成立時期は13－14初頭とされ、それゆえそこに示された硫黄島のイメージは、鎌倉時代の京都の権力者

や人々のそれであったといって大過なからう。しかし、当時の薩摩・大隅の人々にとって、当然ながら硫黄島はもっと身近な島であるとともに、富を生み出す活力のある島であった。なぜならこの島は、アジアを代表する良質な硫黄の産出地として知られており、宋をはじめ東アジア各地から注目される島であったからである。

近年、山内晋次氏は、11世紀末、宋が西夏との戦争のなかで火薬兵器の緊急配備が必要となり、その原料調達のため日本産硫黄の大量買い付けが行われ、その頃から硫黄島が注目されるようになることを明らかにしている（山内2009）。今回、私たちの硫黄島調査では、地表面採集・発掘のいずれによっても、11世紀後半以降、陶磁器類が検出されるようになることを明らかにした。これは硫黄島が宋によって注目され、日本産硫黄の大量買い付けが実施される時期に該当し、それ以降、硫黄島の地位と役割が急速に上昇していったことを暗示する。藤原成経・平康頼・俊寛らが「薩摩方鬼界が島」（硫黄島）に配流に処せられたのも12世紀後半であり、さらに正嘉2年（1258）には康頼の孫俊職もこの島に流される（『吾妻鏡』正嘉2年9月2日条）など、これ以降、硫黄島は硫黄産出地であるとともに、流刑地としても歴史の舞台に明確にその名を刻み込むようになる。

12世紀中後期、硫黄島・竹島・黒島は薩摩国川辺郡に属し、トカラ列島の島々とともに12島の纏まりとして一括して扱われ、川辺郡郡司職を持つ川辺氏（薩摩平氏）の支配下にあった。川辺氏は治承・寿永の内乱（源平の合戦）を生き抜くが、13世紀前期の承久の乱で京方に属して後退、これにかかわって北条得宗（北条氏の本家）が川辺郡郡司職・地頭職を掌握し、まもなく得宗被官の千竈氏が郡司職・地頭代官職として入部、「口五島」に属する硫黄島・黒島・竹島や「奥七島」に属するトカラ列島の島々など、海の道に沿った島々の延長上に奄美大島・喜界島などへも支配の輪を拡げていった（『千竈文書』、柳原1997、小田1993、永山1993・1997、村井2005）。

しかし、鎌倉幕府の滅亡とともに千竈氏が後退、かわって薩摩守護職の島津氏が、源頼朝より与えられた「十二島地頭職」（十二島は「口五島」「奥七島」）をもとに、トカラ列島を越えて奄美諸島へも支配権を行使するようになり、配下の領主たちに島々を分け与える中で、1412年（応永19）、種子島の種子島氏に「硫黄島・竹島・黒島三島」を与えていた（『種子島家譜』、

村井2008、屋良2012）。当時の種子島氏は、島津氏の家臣というより目下の同盟者と呼ぶべき存在であり、種子島・屋久島・口恵良部島を知行し、新たに「硫黄島・竹島・黒島三島」を獲得することによって、九州から琉球にかけての海域で存在感を増大させることになった。

それからまもない1429-30年代前半（永享初-半ば）、種子島氏は竹島籠港（現在の竹島港の反対側にあるが、崩落が進み閉鎖されている）での「唐船」漂着をめぐる讒訴によって、島津氏から「硫黄島・竹島・黒島三島」を没収されてしまう（『種子島家譜』、村井2008、屋良2012）。この事件の顛末はおおよそ次のようなものである。

博多船（博多商人の貿易船と見られる）が琉球からの帰り道、種子島氏の知行する竹島で暴風雨に遭って、船と人が海中に没した。そのことはすぐ島津氏に伝わったが、この船の遭難について、竹島漂着の「唐船」を種子島氏が襲って積み荷を奪った、と讒訴する者があったため、島津氏は種子島氏から硫黄島など三島を没収した。

この一件は、種子島氏が三島を没収された点もさることながら、すでに15世紀前半に博多船が博多-琉球間を往反していたこと、讒訴者の「唐船」という表現から博多-琉球間の航路には中国船も参入していたこと、種子島氏知行の竹島など博多-琉球間の島々が船の寄港地・漂着地となっていたこと、これらの船船がもたらす富の争奪があったことなど注目すべき事実を伝えている。これらの諸点と関わって、島々の知行は廻船の知行と同義であったとする屋良健一郎氏の重要な指摘が想起される（屋良2012）が、生産性の低い中世の島々の知行が大きな意味を持ち得たのは、まさしくこの点にあったといつてよからう。

15世紀後半以降、種子島氏は自立性を強化し、島津氏と関わりなく琉球との貿易を展開するようになる（屋良2012）が、その頃の「硫黄島・竹島・黒島三島」がどのような状況にあったのか、島外史料はほとんど存在しない。そこで以下、私たちの調査で確認または再確認した島内史料をもとに、「硫黄島・竹島・黒島三島」の内情を見ていくことにしよう。

2. 島内史料による中世三島の概観

地表面採集と発掘調査の成果については、すでに言及しているので、ここでは三島内に残る中世の石造物群の在り方から見えてくるもの、「長浜氏嫡流系譜」

(三島村保管史料) など後世の文書・記録から汲み取れるものを中心に紹介し、考察を加えていくことにする。

石造物調査の成果 まず石造物について見ると、竹島では①観音堂跡、②集落の共同墓地の2ヶ所で中世の五輪塔・宝篋印塔・層塔・石幢が確認されており、残欠まで含めれば20基を有に越える。石材は喜界カルデラの噴火によって噴出した船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)と、薩摩半島南端部の山川港周辺で採石された山川石が中心である。船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)は、硫黄島の一部にも堆積しているが、現在の竹島港周辺に分厚い堆積層が存在し、近世には石工の活動が確認される(三島村1990)ことから、島内で採石された石材を使用して制作されたものと考えて大過なからう。石材の変遷から見ると、14世紀初め～15世紀前半に船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)製の石塔類が造立され、ついで15世紀半ばに搬入品である山川石製の石造物が登場し、16世紀後半より急増し、そのまま近世・近代まで造立されつづけたことが明らかとなる(三島村中世資料調査団2013)。

硫黄島では、①ジャンベスクール敷地の一角に建つ板碑、②伝平家墓の石塔群、③集落内の道路脇の石垣に積み込まれた石塔群、④③を上った藪の中に埋もれた石塔群、⑤黒木御所跡、⑥伝安徳天皇墓所の石塔群、⑦集落の共同墓地などにおいて、残欠まで合わせて数えるなら、60基を越える五輪塔・宝篋印塔・層塔・長足五輪塔・角柱塔婆・板碑が確認されている(三島村中世資料調査団2013)。このうち①②は、硫黄島港を臨む磯松の台地上の古墓地に立ち並んでいたものの一部であり、③④⑤も同じくその一部であった可能性が高い。この古墓地は、1956年(昭和31)の鉱石集積場建設に際して消滅し、そこに立ち並んでいた石塔群の一部が移設されて①②になったが、内容の共通性や島民の話から判断すると、③④⑤もまたそのときに処分されたものの一部と考えてよからう。⑥については、磯松の古墓地からやや離れたところにあるが、伝安徳天皇墓所が中世・近世前半期まで遡る可能性はほとんどないことから見て、おそらくこれらの石塔群もかつては磯松の古墓地にあったものと考えるのが自然であろう。

これに対して⑦は、1957年(昭和32)の小学校敷地拡大の際、硫黄島墓地が現在地に移設されたときに運び込まれてきたもので、山川石と産地不明な石材からなる石塔類であり、いずれも16世紀後半以降、近代に

かけて造立されたものであった。このことから、磯松にあった古墓地は、主として戦国時代まで稼働していたものであることが判明するが、実際、①～⑥の石塔群は、13世紀末～14世紀初頭から15世紀前半までの船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)を石材とするものと、15世紀後半を主体とした山川石製の石塔群からなっており(三島村中世資料調査団2013)、16世紀中ば頃に磯松古墓地から現小学校敷地にあった共同墓地へという、集落墓地の変遷を読みとることができる。また、船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)は、竹島で採石・加工されて搬入されたものである可能性が高い。

黒島についてみると、①大里共同墓地(大墓)石塔群、②片泊に近い「イバドンの墓」石塔群、③中里の伝平家墓の石塔群、④片泊の石塔群など、残欠まで合わせて50基余が確認されている。登場時期は硫黄島・竹島とほぼ同じ14世紀初めであり、石材は船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)である。15世紀半ば以降、山川石を石材とする石塔類が出現する点も、他の二島と共通しているが、船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)を石材とする石塔の比重が大きい点は、他の二島と若干の相違がある。黒島には船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)が存在しないことから、竹島で採石・加工されて、搬入されたものと考えて大過なからう。

これらの石塔類の形態は、五輪塔・層塔・宝塔(?)からなっており、硫黄島・竹島に較べてやや単調であるが、14世紀初め頃の五輪塔2～3基は、三島村ばかりか薩摩半島まで視野を拡げてみても屈指のもの(大型で造りもよい)であり、この島にかなりの有力者がいたことを暗示する。

また、②の宝塔(?)には「イバドンの墓」とする伝承がある。それは、源頼朝の命で平家追討にきた大庭三郎家政(宇都宮信房の一族)が、島の美しい女性に恋をして、信房と一緒に帰えらず島に止まって、その女性と暮らすようになった、その大庭三郎の墓「大庭殿の墓」が転訛して「イバドンの墓」となったというものである。もとより石塔自体は14～15世紀頃のものであるが、この伝承は、天野遠景・宇都宮信房が頼朝の命で「貴海島」に潜む源義経「与同の輩」を追討した史実(『吾妻鏡』文治4年2月17日条、同3月5日条、同5月17日条)と重なるものであり、また、「大庭」(大羽、尾羽)が宇都宮氏の廟所のある由緒の地であることなど確かな情報を含んでいることから見て、このとき信房らが渡海した「貴海島」が、硫黄島でも奄美諸島の喜界島でもなく、ほかならぬこの黒島

であったことを暗示していると捉えることができよう。

石造物調査成果が語るもの 以上のような、石造物調査の成果から次のような諸点が見えてくる。その第1は、竹島・硫黄島・黒島ともに鎌倉末期の14世紀初頭から石塔類の造立が開始されることであり（硫黄島が若干早い形跡がある）、これは薩摩・大隅、さらには九州における石造物造立の動きにほぼ対応するものである。その中でも注目されるのは、硫黄島に残存する13世紀末－14世紀初頭の長足五輪卒塔婆・角柱塔婆であり、これらは当時の畿内系石造物の最新情報によって造立されたと考えられ、九州では他に例を見ないのである（三島村中世資料調査団2013）。硫黄島にはそれだけ早く、畿内方面の文化やその担い手の往来があったことを物語っている。

第2に注目されるのは、竹島・硫黄島・黒島の石塔類は、鎌倉末期に造立が開始されたあと、外部の石造文化の大きな影響を受けず、独自の発展を遂げて个性的な形態を見せるようになる点である。その石材も船倉火砕流堆積物（熔結凝灰岩）が一貫して使用されつづけ、五輪塔や層塔など三島に共通した塔形を生み出す。子細に見れば、三島それぞれに個性はあるが、全体に共通性が多く、人や物の動きに対応した同一の生活・文化圏に属していたことを示している。

第3の注目点は、15世紀半ばを分水嶺として、石材に大きな変化が生じてくることである。すなわち、それまで石材の大部分を占めていた船倉火砕流堆積物（熔結凝灰岩）が激減・消滅し、入れ替わるように山川石製の石造物が搬入されるようになる。竹島では、近世においても船倉火砕流堆積物（熔結凝灰岩）が「竹島石」として切り出されている以上（三島村1990、現在も厚い堆積層がある）、15世紀半ばに石材を切り出し尽くした結果として現れた現象ではあり得ない。確かに山川石は、粒子が細かく薄黄色をした美しい石材であり、船倉火砕流堆積物（熔結凝灰岩）よりも高級感のある石材であるが、豊富にある地元の石材を使用しなくなる背景には、薩摩山川石工の営業の活発化やそれに圧倒された竹島石工の衰退など、石材の生産・加工を含む物流システムや流通に関わる人々の変化を想定しておくべきであろう。

第4に注目したいのは、15世紀半ばを分水嶺とする石造物の変化は、単なる石材の交替に止まらず、石塔類の造立主体の変化をも伴うものであったことである。すなわち、13－14世紀の船倉火砕流堆積物（熔結

凝灰岩）製石造物は、比較的大型で造りのよいものからなっており、その造立主体は一定の権力と財力を有する者が中心であったのに対し、15世紀後半以降の山川石製石造物は、小型化する一方でその数を増大させ、造立主体が下降分散化していく傾向を示しており、その背景に集落の構造変化が生じていたことを物語る。その点で、戦国期に進展した硫黄島磯松の古墓地から現小学校敷地（熊野神社裏）共同墓地への移行は、硫黄島の集落構造の変化に伴って生じた象徴的な動きとして注目される。

第5に注目されるのは、100基を優に超えるこれらの石造物が、数少ない島外史料の空白を埋め、鎌倉～戦国・近世初頭の島々の内実を私たちに語り始めた点であろう。もとよりまだ不明な点は多いが、『平家物語』に見える俊寛らの流刑、『吾妻鏡』が記す天野・宇都宮氏による「貴海島」追討など、12世紀後末期に相次いで起こった出来事が、文字史料に登場した「硫黄島・竹島・黒島三島」など「貴海島」（「鬼界島」）の最初の画期であったとするならば、島内の有力者による石造物の造立が始まる13世紀末－14世紀初頭は、それに次ぐ第2の画期であったと見なせよう。さらに石材と造立主体に変化が現れる15世紀半ばは、石造物の有り様から読みとれる明確な変化であり、これを「硫黄島・竹島・黒島三島」などの第3の画期として位置づけることができる。

これらの変化・画期は、地表面採集や発掘によって得られた貿易陶磁器の有り様とも対応しており、出現－増加期の11世紀後半－12世紀は第1の画期、未検出期の13後半－14世紀は第2の画期、そして染付け・日本産陶器が検出される15－16世紀は第3の画期にほぼ符合しているが、さらにこれを島内に残る「長浜氏嫡流系譜」など後世の文字史料から史実を汲み取り、「硫黄島・竹島・黒島三島」の歴史を明らかにしていくことにしよう。

島内の文字史料が語るもの 前述のように、「長浜氏嫡流系譜」（三島村保管史料）の平安～南北朝期の記載については、荒唐無稽なことが多く書かれており、とうてい信用することはできないが、15世紀後半以降になると、以下のように現実の世界との接点が見られるようになる。

①権四郎定吉の嫡男伊右衛門吉凡（1490年、延徳2年生まれ）は、大船・小舟や下人・下女を多く持つ富貴の者であり、その弟の源次左衛門吉公は久しく京都や大阪に住み、商人となって活動した。

- ②伊右衛門吉凡の嫡男^{い き のかみよしずみ}吉澄（1507年、永正4年生まれ）は、大船等を持つ富裕の者であったが、1562年（永禄5）に島へ強盗が入り、人や系図・祝詞・仏像・家宝の数々を紛失した。吉澄の弟^{きんさぶろう}吉三郎は、安永丹下の養子となり「竹之島」（竹島）に住み、妹は岩切佐七の妻となった。
- ③吉澄の嫡子^{しちろう ざ えもんよしきよ}七郎左衛門吉清（1526年、大永6生まれ）は、大船・中船を多数所持し、自ら「上方」へ上って盛んに商売を行っていたが、1558年（永禄元）に日向国志布志（鹿児島県志布志市）で病死した。吉清の後妻が善悪を弁えない「悪女」で、勝手な振る舞いと豪華な生活をしたあげく、1573年（天正元）8月、出火して家を全焼し、飛び火して熊野権現宮まで焼失してしまった。そこで「上方」にいた吉清の弟次郎^{じろう ざ えもんよしなり}左衛門吉也が島に呼び戻され、幼い吉清の嫡子を後見し、長浜家の「名代」を立派につとめた。やがて吉也は「畠屋敷」を分与され、安永家を継いだ。
- ④吉清の嫡子は、1550年（天文19）の生まれ、長じて太郎左衛門吉延と名乗り、21代目当主となって「長浜中興祖」とも呼ばれた。吉延の時代、1562年（永禄5）に硫黄島へ強盗に入った者たちが、志布志^{た はるまたしちろう}の田原又七郎のところへ盗物や人を売りに来たが、又十郎は吉澄・吉清の代から長浜家と知己の関係にあったので、盗物や人がすぐに長浜家のものと分かり、吉延と一緒に強盗を折檻する一方、銭を渡して盗物・人を取り戻した。朝鮮出兵のとき、吉延は島津氏の鉄砲組に編成され、家臣^{わたなべちやう ざ えもんつなさだ いわきりちやう えもんのぶつな}の渡辺長左衛門綱貞・岩切長右門延綱らと渡海し手柄を立てた。

これらの記述をすべて鵜呑みにすることはできないが、記述がかなり具体的になっていることに加えて、近世の長浜氏がやはり船を所有した有力者であること（「長浜家文書」）、志布志が九州南東部随一の海運上の要衝であり（市村2006）、隣接する櫛間湊には島津氏から琉球渡海朱印状を与えられた日高紀伊守らの海商がいた（徳永2010）こと、15世紀後半－16世紀が南島－畿内の往来が活発化する（市村2010a、屋良2012）ことなどからみて、ある程度事実を反映していると考えて大過ないであろう。

すなわち、①②③の記述内容からは、長浜氏が多くの船を所有した海商と呼びうる存在であったこと、硫黄島から日向の志布志や畿内にまで交易活動の輪を拡げていたこと、それらの活動が15世紀後半には始まっ

ていたことなどが窺える。また、③④の記述内容からは、16世紀半ばの停滞期があったらしいこと、16世紀後半の吉延の時代に本格的な発展の基礎が築かれ、それによって吉延は「長浜中興祖」と認識されるようになったこと、さらに③④の記載から、長浜氏が比較的早くから志布志の住人との交流があったことなどを読みとることができよう。

以上のように、後世の史料ではあるが、「長浜氏嫡流系譜」を子細に検討してみると、長浜氏の硫黄島への来島・定着は、15世紀後半以降のことであり、16世紀後半になって近世に繋がる同家の繁栄の基礎が築かれていったことが見えてくる。この変化は、石造物の石材が山川石に変わること、染付けなど貿易陶磁器出土の第二のピークともおおむね合致しており、長浜氏の硫黄島来島（岩切氏らと一緒に来たとされる）も、15世紀後半の社会の転換の一環をなす動きであったことが容易に察知されよう。

Ⅲ. 日本中世の境界領域と黒潮トライアングル

1. 硫黄島・竹島・黒島の役割と歴史的位置

本稿では、硫黄島・竹島・黒島の調査成果の概容を紹介し、主に島内史料の検討から見えてくる歴史像の大枠を提示することにつとめた。もとより解明したことすべてを論じることはできなかったが、少なくとも、これまで島外史料に基づきつつ、主として畿内から見た中世日本の西の外れ、西の境界領域として位置づける研究に対し、境界領域からの視点でその内実を解明しようという目的は、ある程度まで達成することができたと考える。しかし、前章までは調査報告と三島の歴史の概容を提示するのみに止まったので、それらの成果を踏まえ、改めてその全体像と歴史的役割について簡単に見ておくことにする。

まず硫黄島についてみると、この島が流刑地であり、良質な硫黄の生産地であったことは前述の通りであるが、より重視されるべき属性は後者にあり、硫黄の供給地として日本国のみならずアジアからも広く注目されたのであった。そのことは、この島では早くも11世紀後半から貿易陶磁器が搬入されていたことや、13世紀末－14世紀初頭に最新の石塔文化が流入し、14－15世紀に造りのよい石塔が多数造立されていたことなどから、一般の島々とは異なる富の蓄積と富裕な人々の存在を想定することができよう。

『平家物語』巻第二は、「さる程に鬼界が島の流人ども、露の命草葉の末に懸つて、惜しむべしとにはあらねども、丹波少将の舅平宰相教盛の領、肥前国鹿瀬の庄より、衣食を常に送られたりければ、それにてぞ俊寛も康頼も命生きては過しける。」と記し、「鬼界が島」(ここでは硫黄島を指す)の俊寛や平康頼らのところに、有明海奥に接する肥前国鹿瀬(嘉瀬)荘(佐賀県佐賀市)から衣食が輸送されていたことを伝えているが、直接、衣食料の輸送に当たったのは九州西岸航路を往来する商人たちであり、この島へ多くの商人たちが集まり来たっていたことの一端を示す。また、この島は硫黄産出地として富と人を集める利点がある一方で、火山活動に伴う酸性雨によって食料生産が限定され、外部からの移送に依存せざるを得ない負の一面をも有していた。

しかし、硫黄が生み出す富の力は、時代を超えて多くの人々を引き寄せつづけていた。島内で検出される多数の石造物(三つの画期がある)や貿易陶磁器(二つのピークがある)は、硫黄が生み出す富を求める人々が波状的に来島していたことを示す。15世紀に来島したと見られる長浜氏や岩切氏らは、その具体的な事例であったといつてよからう。彼らは鉾山に蟠集する権力・商人・労働者と通じる存在であり、硫黄島の集落は硫黄岳という鉾山に多くを依存した港湾集落であった。

次に黒島についてみると、この島は三島の中で最大の規模を誇りながら、これまであまり注目されなかったように思われる。確かに、この島には硫黄島の硫黄のように、島の顔となるものは存在しないが、私たちが確認・再確認した石塔類の数々は、14世紀初頭に遡る大型の五輪塔をはじめ、硫黄島のそれを凌ぐほどの内容を有しており、この島に硫黄島を上回る権力者が存在したことを想定させる。

その点で注目されるのが、片泊の集落に近い「イバドンの墓」にまつわる宇都宮氏関連伝説である。前述のように、この伝説は、『吾妻鏡』に見える頼朝の命を受けた天野遠景・宇都宮信房らの「貴海島」追討の記事と符合する点が多く、このとき彼らが渡海した「貴海島」とはこの黒島であった可能性が高い。そして、信房らが源義経に与同する輩を追討した事実は、この島が政治・軍事の面での中心となる場所であったことを示しており、大里の共同墓地(大墓)の中世五輪塔群が「平家大将の墓」と呼ばれている(三島村1990)のも、そうしたこの島の性格の一端を伝えるも

のであろう。

次に竹島についてみると、この島も硫黄島と同時期に貿易陶磁器が搬入されており(橋口 亘氏のご教示)、石造物も硫黄島・黒島とほぼ同じ頃から造立されていた(三島村中世資史料調査団2013)が、その数は他の二島に較べて相対的に少数であり、その点に島の位置をかいま見ることができる。しかし、13世紀末～15世紀半ばの三島の石造物の石材は、ほとんどが竹島で採石される船倉火砕流堆積物(熔結凝灰岩)であり(三島以外でこの石材は使用されていない)、この島が三島の石材供給地として極めて重要な位置を占めていたことを示している。

以上のように、この三島は、政治的中心としての黒島、硫黄生産地として富が集中する硫黄島、石材供給・加工地としての竹島、というように、それぞれに独自の役割を有していた。もとよりこれですべてが説明できるわけではないが、少なくとも今回の調査によって明らかになった三島それぞれの特徴は、このように集約することができるであろう。

その上で、三島に共通した特徴・性格を求めるならば、東シナ海を往来する船舶の寄港地・停泊地という点にたどり着くことになろう。その点で改めて注目されるのは、15世紀前半に竹島籠港の博多船漂着めぐる一件であり、小規模なこの港が東シナ海を往来する交易船の寄港地・漂着地として重要な意味を持っていた様子が見えて来る。現在、籠港は閉鎖・廃止されているが、交易船の寄港地となっていた時代には、当然ながら港湾管理や積荷の受け渡しに関わる人々が存在したはずであり、硫黄島の港湾集落のような規模(近代の最盛期には1000人を越える人が居住したという)になれば、商人らが蟠集する都市的な場に成長していた可能性がある。15世紀後半に長浜氏ら海商が来島したのも、鉾山とその積出港としての硫黄島港が持つ大きな吸引力に引き寄せられたものであった。

その点と絡んで、今回の調査で確認された大里大墓に残る15世紀代の五輪塔火輪の線刻船絵(2艘)は注目に値する。この線刻絵は追刻の可能性もあるので、なお慎重な検討が必要であるが、人目に付かない火輪の裏側に刻んであることから、被葬者または供養者に手向けた絵と解釈され、被葬者・供養者が船による海上活動を生業とする人々の主導者であったことを想定させる。実際、近世・近代の黒島や硫黄島・竹島では、狭小な島で食料の一部を生産し、船頭・水主などの船乗りとして生活する人々が多いこと(三島村

1990、「長浜家文書」から、同じような状況の中世に遡らせてみてもおそらく大過ないであろう。

2. 日本・琉球・東アジアと黒潮トライアングル

「長浜氏嫡流系譜」では、15世紀以降の長浜氏が硫黄島のほか、竹島・黒島の有力者と婚姻・養子関係を取り結んだとする記載が急増する。これは、硫黄島・竹島・黒島が同じ生活・文化圏に加え、通婚圏という面でも一括できる島々であったことを示している。1889年（明治22）、硫黄島・竹島・黒島はトカラ列島の島々と合わせて十島村^{じゅうとうそん}となり、大島郡に編成されたが、三島は旧慣によって川辺郡^{かわべの}を称することが多く、やがて1952年（昭和27）、十島村から分かれて三島村となったのも、この三島とトカラ列島の島々との生活・文化・通婚圏の違いから生じた動きであった。

歴史的に見ても、硫黄島・竹島・黒島は中世から「口五島」に属し、「奥七島」と呼ばれたトカラ列島の島々から峻別されていた。この点は、中世史学においては周知の事実となったいるが、それが生活・文化・通婚圏の違いに由来としても、なにゆえその違いが生じたかについては、あまり考えられることがなかったように思われる。しかし、そこに黒潮の視点を導入することによって興味深い事実が見えてくる。

世界最大の海流とされる黒潮は、フィリピン諸島の東で流れを北に変え、台湾と石垣島の間から東シナ海に入り、先島諸島・沖縄諸島・トカラ列島の西方を北上、北緯30度付近で東へ蛇行し、口恵良部島・屋久島・種子島の南側を抜けて太平洋に入り、四国沖から東海沖へと流れていく。「口五島」と「奥七島」は、北緯30度付近で東へ蛇行する黒潮によって分断され、その北側が「口五島」（「端五島」ともある）であり、南側の「奥七島」のかなりの部分は東流する黒潮に洗われている。鹿児島を発ってトカラ列島に向かう航路は、昔から「七島灘」の難所として恐れられているが、それはこの黒潮の流れに起因するところが大きく、そこをわたらなければ種子島・屋久島の南へ行くことができなかったのである。昭和の半ば過ぎまで、トカラの島々はフェリーが接岸できず、舢舨を使って接岸・上陸していたといい（斎藤2008）、現在でもトカラ海域の荒波はしばしば人々の話題に上る。「口五島」と「奥七島」という区分が、黒潮の流れに規定されつつ生み出された生活・文化・通婚圏の違いであったことは間違いないところであろう。

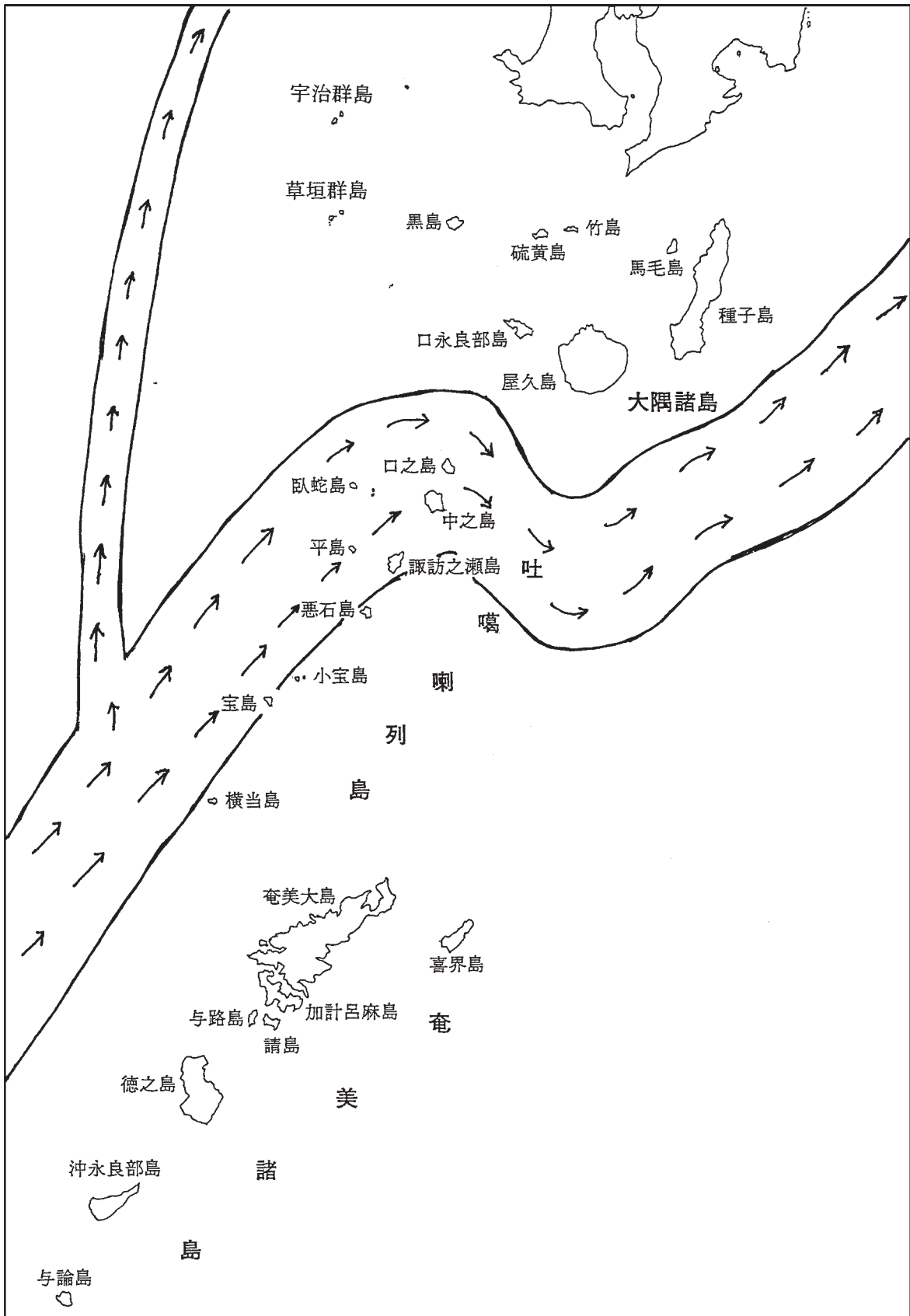
黒潮の北側の「口五島」は、硫黄島・竹島・黒島の

三島のほか、屋久島・口恵良部島を加えた五島とする見解（永山1993・1997・2008）と、宇治群島・草垣群島を宛てる見解（村井1997・2008）とが対立しているが、両説が比定する島々はすべて黒潮の北側に存在する。一方、「奥七島」については、口之島・中之島・臥蛇島^{がじゃしま}・平島^{すわのせじま}・諏訪之瀬島^{あくせきじま}・悪石島・宝島とすることで見解の一致を見ており（永山1993・1997・2008、村井1997・2008）、いずれもトカラ列島を構成する島々である。この「口五島」と「奥七島」とを合わせた12島は、すでに12世紀半ば過ぎから薩摩国川辺郡として編成され、郡司職を持つ薩摩平氏の支配下に置かれていた。この12島は、それぞれに自立した別個の纏まりを形成しながらも、一括して扱い得る共通した性格を有する島々であったことが明らかとなろう。

それではその共通した性格とはいったい何であろうか。まず考えられるのは両者の海を媒介とした交流である。前述のように、黒潮が両者を区分していることは間違いないが、北緯30度付近での東への蛇行、さらに屋久島・種子島の南東での北への蛇行によって、最大4ノットともいわれる黒潮の流速が、三島の南側周辺で若干減速するため、季節風を利用した渡り目となっていたのである。こうした黒潮の渡り目は、沖縄諸島の久米島付近にもあったことが指摘されており（金沢2002）、海に生きる人々は、先人の経験則として受け継いだ航海技術によって、荒海を越えた交流を展開していたのである。

その点で注目されるのは、南島史に見直しを迫る奄美諸島の喜界島城久遺跡群の調査である。この遺跡群は8世紀後半－10世紀前半、11世紀後半－12世紀前半の二つのピークがあり、10－11世紀には太宰府の出先機関が設置されて、「日本国」に敵対する奄美大島に対峙していたとされている（鈴木靖2008）。また、この遺跡群からは、第2のピーク期のものと見られる西彼杵半島（長崎県西海市）産の滑石製石鍋が多数出土し、「石鍋流通の窓口となるような場所」と評価される（鈴木康2008）など、10－11世紀段階で博多・太宰府と喜界島とを結ぶ、九州西岸経由の太いルートが成立していたことが明らかになってきた。

さらに、螺鈿などの材料となる夜光貝の供給地が奄美大島北部や喜界島であったこと、そこから黒潮流域沿いに九州へ輸送され、12世紀の畿内や平泉等で大量に消費されていたこと（高梨2005）や、朝鮮半島の製陶技術の影響を受け、11－14世紀の徳之島で生産されていたカムイヤキが、南は沖縄諸島から北は九州南部



第3図 薩南諸島の島々と黒潮
(黒潮の流れは海上保安庁のデータによる)

にまで供給されていた事実（赤司1999、新里2002）など、考古学の発掘成果を通じて新たな事実が解明され、琉球から奄美・トカラ・九州、さらには朝鮮半島まで通じる南北の「海上の道」が早期に成立していたことも明らかになってきた。そして、15世紀以降には、「七島衆」と呼ばれる薩摩・琉球間を往来する商人たちの活動が見られるようになり（紙屋2009）、16世紀の南九州・琉球間交易の一角を担うなど重要な役割を果たしていた（深瀬2007）。これに、種子島氏や島津氏が行っていた琉球との交易（屋良2012）を重ね合わせてみるならば、南九州から琉球に通じる列島弧の海域が一つに繋がっていたことは益々明瞭になるであろう。

しかし、同時にこの海域は、日本と琉球とのせめぎ合いの場でもあった。前述のように、律令国家から王朝国家（摂関政治）の時代、日本は早期に南島へ勢力を伸ばし、10-11世紀には奄美諸島の喜界島に九州を管轄する機関である太宰府の出張所的役所を設置していたが、それによって奄美・琉球が、日本文化の刺激を受けて新たな発展を遂げ、次第に勢力を北上させて、ふたたび日本を押し返すようになったのである（鈴木靖2008）。そして、14世紀の三山並立を経て、15世紀前半には尚巴志が沖縄本島を統一、さらに15世紀末には第二尚氏王朝の尚真が奄美諸島を統合し、支配の内実を整えつつ琉球王国の最盛期を招来したのであった（高良1987、豊見山2002）。

そして、琉球王国は、15世紀後半から16世紀半ばにかけて、日本・明・朝鮮のほか、シャム国（現在のタイ）・マラッカ・パタニ（マレー半島の港市）・マジヤパピト国（ジャワ島の国）・パレンパン（スマトラ島の港市）・サムドラ国（スマトラ島の国）・安南国（現在のベトナム）など、東南アジア・南アジアの国々や港市と盛んに中継貿易を展開したのである（豊見山2002）。これに伴って、琉球の首都首里の外港である那覇と、明の泉州ついで福州との往来が一層活発化し、日明貿易で使用された博多・五島の小値賀と明州（寧波）を繋ぐ海路、薩南の坊津と明州を繋ぐ航路などとともに、黒潮の流れを横断して大陸と日本列島を強く結びつけていた（市村2010b）。

以上のように見ると、日本・琉球・中国の交流・交易の舞台は、かなりの部分で黒潮トライアングルと重なっており、取り分け琉球の中継貿易の舞台は、その枠を大きく越えて南アジアにまで拡がりを有していたことが明らかとなろう。その点を踏まえ、改めて黒潮

トライアングルと仮称される東アジアの黒潮流域圏を俯瞰すると、そのかなりの部分は日本と琉球・奄美のせめぎ合いの場であり、人や物が最も活発に行き交う海域となっていたこと、本稿の主たる調査対象の「口五島」や「奥七島」が、紛れもなく日本と琉球との境界領域であったことが明確になってくる。

しかし、翻って考えるなら、境界領域とは二つの国家などの組織や社会集団の狭間に当たる領域を指しており、いわば二つの周縁部の接触領域に他ならず、それゆえに境界領域は、ともすれば中央・中心から見た周辺や辺境としての位置を与えられがちである。それに対して本稿では、境界領域そのものに焦点を当て、その実態と特質を明らかにし、境界領域を中心として、日本や琉球の歴史を捉え直そうとした。こうした海域に焦点を当てた研究は、近年急速に進展しつつある（村井1995、高橋2001、吉田2004、榎本2010、橋本2011）が、本稿は「境界領域」に点在する島々の内実を学際的に解明し、そこに黒潮トライアングルの議論を重ね合わせながら、人文・社会科学と自然科学の共同による、新たなアジア史構築のための基礎を固めようとするささやかな試みであった。

おわりに

以上、本稿では、硫黄島での発掘調査と硫黄島・竹島・黒島での史資料調査の成果の概容を紹介しつつ、そこから見えるいくつかの論点について簡単な考察を加えてきた。紹介しきれなかったことが多いばかりか、考察もかなり粗く不十分なものとなったが、それらの欠は別稿で補うこととして、ここでは「黒潮圏科学」で問題となる黒潮S状帯や黒潮トライアングルに関わる若干の論点について提示することによって、まとめに変えたいと思う。

その第一は、黒潮トライアングルが、中世日本の西の境界領域や琉球王国を含む海域・領域にほぼ重なっており、東アジアの中で日本・琉球の成立と展開を考える際の重要な空間となることである。とりわけ黒潮トライアングルの中北部は、日本と琉球とのさまざまな面でのせめぎ合いの場であり、また、相互に影響し合う重要な場であったが、これまでの歴史学では、黒潮の存在を意識しつつ、この海域について考える研究が少なかったのが実情である。しかし、不十分ながら本稿で示したように、黒潮という巨大な海流の存在とその特性を踏まえ、改めてこの海域を捉え直すなら

ば、これまでとは異なる新たな歴史像を描き出すことが可能となるであろう。

第二に注目したいのは、14-16世紀に発展期を迎えた琉球が、黒潮トライアングルを越えて、朝鮮・華南・東南アジア・南アジアとの交易を実現させた点であり、人間による黒潮S状態や黒潮トライアングルへの対応が、アジア各地との交流を切り開いていったことである。この海域の人々は、長年の経験智と技術開発などによって、黒潮との共存・共栄を実現させたのであり、それは人と自然の係わり方を問うことにも繋がっている。この視点の延長でいえば、黒潮S状帯や黒潮トライアングルの問題は、海洋環境や海底資源・生物資源・生物多様性など自然科学からのアプローチばかりでなく、人文・社会科学からも積極的に検討の輪に加わり、人間と自然の関係とその変遷論として総合的に考察していくことが必要である。その積み重ねが、文理融合型の新たな研究法の創出に繋がるのではなかろうか。

第三に、本稿の主題と関連する論点を提示すると、古代・中世の航海は、黒潮の流れに左右されながら、島伝い航路をとって展開され、そして黒潮の特性を踏まえつつ、広くアジア各地との交流を実現していったが、そこで注目されるのは、航路に沿って点在する島々の役割である。黒潮トライアングルの北部に位置する鹿児島県三島村・十島村は、文字通り島々の集合体からなる自治体であり、中世にはともに薩摩国川辺郡に属しつつも、日本の西の境界領域「貴海島」と認識されていた。畿内の居住者の視点からすれば、薩摩の南海上に浮かび、奄美・琉球に通じるこれらの島々は、確かに境界領域「貴海島」あるいは「鬼界島」とも認識されようが、薩摩の住人や当の島人とかからすれば、そこが中心の一角をなすところであった。そうした視点から境界領域の島々を捉え直す研究が求められる。

これらの島々は、薩摩本土から南へ航海する船舶が、黒潮の流れに対応すべく島伝いの航路をとれば、必ず寄港地として利用するところであり、その積み重ねの中で薩摩・大隅その他各地との日常的な交流の輪が広がられていった。これらの島々には硫黄島のように資源を持つ島や人の生活・生産が可能な島もあれば、寄港地として以上の意味を持ち得ない島も存在する。しかし、これらの島々が古代・中世から今日に至るまで、どのように黒潮と係わり、島人や寄港者と関わってきたのかは、高度経済成長期以降の衰退の時代

を除けば、充分明らかにされていないのが実情である。確かに史料の欠如という制約はあるが、これらの島々の変遷を究明し、最も輝いた時代の条件を解明することができれば、多少なりとも再生への糸口を見出すことも可能であろう。黒潮圏を追究する学問の存在意義は、このような点にも見出すことができる。

参考文献

- 市村高男. 2006年. 「日本中世の港町－その景観と航海圏－」『港町の世界史第二巻港町のトポグラフィ』青木書店.
- 市村高男. 2010a. 「海運・流通から見た土佐一条氏」『中世土佐の世界と一条氏』高志書院.
- 市村高男. 2010b. 「中世の航路と港湾」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館.
- 榎本 渉. 2010年. 『僧侶と海商たちの東シナ海』講談社.
- 小田雄三. 1993年. 「嘉元四年千竈時家処分状について」『年報中世史研究』18号.
- 金澤 陽. 2002年. 「前近代東シナ海民間貿易航路」『アジアの海 沈没船が語る中世交流史』国立歴史民俗博物館.
- 紙屋敦之. 2009年. 「七島・七島衆と東アジア海域」『東アジアの歴史・民俗・考古』雄山閣.
- 斎藤 潤. 2008年. 『吐噶喇列島』光文社.
- 鈴木靖民. 2008年. 「喜界島城久遺跡群と古代南島社会」『古代中世の境界領域キカイガシマの世界』高志書院.
- 鈴木康之. 2008年. 「滑石製石鍋の流通と琉球列島」『古代中世の境界領域キカイガシマの世界』高志書院.
- 高梨 修. 2005年. 『ヤコウガイの考古学』同成社.
- 高橋公明. 2001年. 『日本の歴史第14巻周縁から見た中世日本』第三部、講談社.
- 高良倉吉. 1987年. 『琉球王国の構造』吉川弘文館.
- 徳永和喜. 2010年. 「戦国期から江戸初期の島津氏外港」『黎明館調査研究報告書』第23集.
- 豊見山和行. 2002年. 『北の平泉、南の琉球』第二部、中央公論新社.
- 永山修一. 1993年. 「キカイガシマ・イオウガシマ考」『日本律令制論集下』吉川弘文館.
- 永山修一. 1997年. 「古代・中世における薩摩・南島間の交流－夜久貝の道と十二島」『境界の日本史』

山川出版社.

永山修一. 2008年. 「文献から見たキカイガシマ」『古代中世の境界領域キカイガシマの世界』高志書院.

橋本 雄. 2011年. 『中華幻想 唐物と外交の室町時代史』勉誠出版.

深瀬公一郎. 2007年. 「十六・十七世紀における琉球・南九州海域と海商」『史観』第157冊.

三島村. 1990. 『三島村誌』.

三島村硫黄島遺跡調査会. 2012年. 『三島村硫黄島遺跡調査会発掘事業概要報告書 黒木御所跡ほか』.

三島村中世資料調査団. 2013. 「鹿児島県三島村の石造物等調査概報－中世鬼界島（貴海島・貴賀島）の内側を探る－」『石造文化研究』第31巻おいた石造文化研究会.

村井章介. 1995年. 『東アジア往還 漢詩と外交』朝日新聞社.

村井章介. 1997年. 「中世国家の境界と琉球・蝦夷」『境界の日本史』山川出版社.

村井章介. 2005年. 『東アジアの中の日本文化』放送大学教育振興会.

村井章介. 2008年. 「中世日本と古琉球のはざま」『古代中世の境界領域キカイガシマの世界』高志書院.

柳原敏昭. 1997年. 「西の境界領域と万之瀬川」『境界の日本史』山川出版社.

山内晋次. 2009年. 『日宋貿易と硫黄の道』山川出版社.

屋良健一郎. 2012年. 「中世後期の種子島氏と南九州海域」『史学雑誌』第121編第11号.

West Border Region of Medieval Japan and Kuroshio Triangle –Based on the Research of Iwojima, Mishima-Mura, Kagoshima Prefecture–

Takao Ichimura

Kuroshio Science Unit (Faculty of Education),

Kochi University, 2-5-1 Akebono,

Kochi, 780-8520, Japan

Abstract

Mishima-mura, Kagoshima Prefecture is a village consisting of islands located southwest of Satsuma penin-

sula. The islands making up the villages are Takeshima, Iwojima, and Kuroshima. These three islands were the boundary regions of the west in Japan during the medieval age, along with the Tokara islands.

Paying attention to this point, I conducted an investigation of documents related to the islands, and investigated ruins on the islands. This paper reports results of this west boundary region research. Moreover, the relationship between this research and the “Kuroshio triangle” was also considered. By this research, I clarified the following items:

1. Historical changes in Takeshima, Iwojima, and Kuroshima were examined. These islands had three transition periods from the second half of the 12th century, the second half of and the end of the 13th century to the first half of the 14th century, and from the 15th century to the second half of the 16th century. The last transition period became a starting point for the early modern age.
2. The third change of Iwojima was brought about by activities of the Nagahama family and the Iwakiri family, who were new migrants from outside of Iwojima. The Nagahama family was a wealthy marine merchant family and the Iwakiri family was involved in engineering in connection with sulfur mining. Soon, the Nagahama family took control of Iwojima and reigned.
3. In the ocean space around Takeshima, Iwojima and Kuroshima, and the Tokara islands, many areas are in the flow of the Japan Current (Kuroshio), and the islands with which it is dotted there have played an important role as ports of call for sailing ships. Shimazu families, Tanegashima families and others considered the rule of the islands, and rule of the merchant ships as one and the same. The islands of this ocean space were indispensable to those voyaging between Kyushu and Okinawa.
4. Most of the islands and ocean space that were the subjects of this research belong to the “Kuroshio triangle”. That was a place where people and goods went back and forth, and was also a place of contention between Japan and Okinawa. Therefore, research of this ocean space and islands is deeply connected with considering the “Kuroshio triangle” from the viewpoint of the humanities. Progress of research by collaboration with the natural sciences, the humanities and the social sciences is desired.

Key word:

boundary regions, Takeshima, Iwojima, and Kuroshima, data in an island, the Japan Current(Kuroshio)